

聞名仏教

第 167 号 毎月発行
(発行日) 2024 年 8 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

「ハイ」と「タイ」

佐々木蓮磨

西田天香氏は人も知る奉仕生活の行者で、一灯園を組織して独自の団体生活を営み、齢九十を超えてもなお奉仕の一路をたどっておられる尊いかたであります。回顧すれば、今を去る三十有余年前のことですが、同氏が臼杵へ二度、三度こられたことがありました。氏のお話には理屈がなく、多く氏の実験談が語られるものですから興味津々として聴衆に飽くことを知らしめなかつたようであります。氏の話の中で忘れられないものが二、三ありますので、ここに紹介してみたいと思います。

氏の言われるには、「世間に教えというものは数多くありますが、要は一つに納まるものです。私に言わせると、いつでも「ハイ」の一語が楽に言えるようになったら、一切の教えを身につけたことになると思いません。「ハイ」が言えないのは、何か一つ自分の都合や勝手を通そうとしているからです。つまり「我」が働くからであります。人間が無我の境地に入ると、いつでも「ハイ」が言えるのです。これは他人に順うように見えますが、実は仏に順うことになっていくのです。ところが、この「ハイ」の返事は易いように見えて、なかなかむつかしいものです。難中の難と言って過言ではありません。しかし、この修行は人間として、別に環境を変える必要もなく、特別な施設や用意も必要としません。いかなる生活の中でも十分にできることでもありますから、人生修行としては最も適当な、しかも最高の道であると思えます云々」と。

また西田天香氏は「タイ」を言わなくてよい身になることが人生修行の極致であると言われました。「タイ」とは「こうしたい」「ああしたい」ということで、われわれの欲をさすのであります。人間は欲のためにみずから苦しめ、他を害さない、世を暗くしているのですから、この欲が軽くなれば、どれだけ自分として楽な生活が

でき、また犯罪が少なくなり、社会が明るくなるか知れぬと思えます。ところで、この「ハイ」の返事ができることも「タイ」を言わなくてよい身になることも、ともに仏法という無我の世界にほかならぬのであります。しかし、天香氏がまつたく仏法臭味のない俗語を用い、しかも俗事の中で立派に実修のできる道をひらかれたことを改めて見直すべきでありましょう。今日、この尊い仏法が一般社会に徹底しない一つの理由は、その表現のことがむつかしくて、一般民衆に通じないことが大きな原因になってはいないかと思えます。この際、西田天香氏の如き平易な表現を他山の石として学ぶべきではないでしょうか。(了)

《孟蘭盆会法要》

八月十日 (土) 午後二時始

法話 念佛寺住職

* * * * *
*法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させていただきます。

対話編 『浄土真宗』

13

A 「これまでアミダ仏の第十八願（因願）については語りました。法蔵菩薩は永きに渡つての修行によつて、第十八願（広くは四十八願）を成就し、すでに十劫の昔に成就して、現在、一切衆生を救う力となつて働いて

いることを、釈尊は『仏説無量寿経』に説かれました。そして第十八願によつて救

われるということはどういうことなのかを無量寿経の下巻のはじめに説かれたのが第十八願成就文です。その内容は、

（諸有衆生 聞其名号 信心 歡喜 乃至一念 至心廻向 願 生彼国 即得往生 住不退転 唯除五逆 誹謗正法）

（諸有の衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。至心に廻向せしめたまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すな

わち往生を得、不退転に住せん）

です。これについてお話ししたいと思ひます。この第十八願本願成就文によつて、アミダ仏の救いが私たちの上に実現するすがたが説かれていきます」

B 「まず、〈諸有衆生 聞其名号（諸有の衆生、その名号を聞く）〉とは」

A 「〈諸有の衆生〉とはもろもろの迷いの境界を流転してきた衆生ということ、仏陀から見られた私たちは、長い間、生まれ変わり死に変わり迷いの境界を流れ転がってきた者といわれ、私たちの姿を教えてください」

B 「私たちがそのように流れ転がってきた存在であるとは私たちには思ひも寄りませんね」

A 「私たち凡夫の心は狭い範囲、浅い範囲のことしか

知り得ません。ただ目先三寸のことしか分からないなどよく言われます。ましてや十年先、世界はどうな

っているのか分かりませんし、それどころか、私は何であり、私という存在がどこから生まれてきたか、また死んでどこへ行くのかなどはまったく分かりません」

B 「私という人間存在がどこから生まれたのか、どうして生まれたのか、本当は何もわかっていないのですね」

A 「だいたい人間存在（身と心）そのものがまったく神秘というか不思議のかたまりです。不思議であり、不可解です。そこで私たちにとつて不可解な人生に、一つの世界観を示して、そこに道理と秩序を与えていく、それが真の宗教であり、また仏教の世界観です」

B 「仏教ではここをどう説

明しているのですか」

A 「簡単に申します。不思議としか言いようのない人間になぜ私は生まれたのか、それを仏教では、前世の私の業（行い）が主たる原因であり、それが因でさらに様々な縁が重なつて、私という人間存在がこの世のあ

る時ある場所に生まれたのだと説明しています。私はこのことを客観的に正しいなどと主張するつもりはありませんが、一つの説明として聞く価値は充分あると思ひます。そういう前世があれば現世があり来世があると仏教では申します。そこで無量寿経で釈尊は、〈汝は真理を知らず迷えるが故に生まれ変わり死に変わりし、いろんな境界を経て、今人間界に生まれているのだ〉と説いてくださっています。これをまず素直に聞いてみようではありませんか。本当にそうなのか凡夫の私には分からなくても、ここには覺りを開いたお釈迦さまの深い洞察があるのであろうと聞くことはできます」

B 「そうするとこの〈諸有の衆生〉は長々と流転してきて、今も流転の中に在る存在、そういう私たちのことなのですね」

A 「ええそうです。そういう私たちを何とか救いたいと法蔵菩薩が願いを起こし、思惟し、願を立て、その願いを修行成就して、私たちに（聞其名号―その名号を聞け）と喚びかけてくださっているのです」

B 「それが次の〈聞其名号〉なのです。其の名号を聞くといわれるのですが、これはどういう意味なのですか」

A 「実は法蔵菩薩はアミダ仏となつて一切衆生を救う働きをし、救ひの恵みを与えようとしてくださっていると申しました。ただこの働きを私たちがどのように知り、そしてその救ひの恵みに預かることができるのかということ、

B 「先生方の説法によつて、アミダ仏は私たちを救う力を実現して現に働いてくださっていることをお聞きし

ますが、しかしどうしたら
そのアミダ仏の救いを知り、
その恵みをいただくことが
できるか、という問題があ
りますね」

A 「ええ、それで私たちに
アミダ仏の救いを知らせ、
救いにあずからしめるのは
どうしたらよいか、それも
法蔵菩薩は考えてくださっ
ていたのです」

B 「では如来法蔵様はどの
ようにしてアミダ仏の救い
を私たちに知らせてくださ
るのですか」

A 「それは一言で言えば、
アミダ仏の救いを南無阿弥
陀仏の名号として衆生に称
えさせ聞かせることによっ
てです。アミダ仏の救いの
働きを本願力といいますが、
その働きは廣大無辺です。
一切衆生を平等に往生させ
る無量の大悲のはたらきで
す。その広大なほたらきを
その質を薄めず、しかも極
めて小さく有限な衆生がそ
れを知ることができるよう
に、無量無限なアミダ仏は
ご自身を限定して表現され
ます。それが言葉にまで成
つてくださったアミダ仏、

すなわち南無阿弥陀仏の名
号です」

B 「それでその名号を衆生
にまで称え聞かせて、救い
を知らせようと誓われたの
が以前お聞きした第十七願
なのですね」

A 「ええ、そうです。第十
七願は

設我得仏 十方世界 無量
諸仏 不悉咨嗟 称我名者 不
取正覚
(たとひ我、仏を得んに、
十方世界の無量の諸仏、こ
とごとく咨嗟して、我が名
を称せずんば、正覚を取ら
じ)

ですが、アミダ仏は、無量
の諸仏・善知識に(アミダ
の名号はすべての衆生の助
かるありがたい恵みですよ)
と讃えられたいと願ひ、そ
れによって一切衆生に救い
を恵もうと誓われたのが第
十七願です。諸仏の名号讃
嘆によつて、それを聞いて
衆生はお念仏を申すように
なり、お念仏を信じるよう
になるのです。一切衆生に
どこどこまでも名号となり

声となつて衆生にアミダ仏
の救いを聞かせたいと誓わ
れたのが第十七願(重誓偈)
なのです」

B 「諸仏・善知識とは」

A 「歴史の上では、釈尊を
はじめ七高僧、法然・親鸞
などの仏陀や祖師方をはじめ
め、法を説いてくださる多
くの先生方といえましょう」

B 「名号を聞くとということ
は単に南無阿弥陀仏という
音声を聞くのではなくて、
南無阿弥陀仏の名号によつ
て現されているアミダ仏の
大悲のはたらきを聞くので
すね」

A 「ええそうです。南無阿
弥陀仏を聞くと言うことは
名号に籠もっている第十八
願の救いを聞くのですね。
十八願の救いは(我が名を
称えるばかりで浄土に生ま
れさせる、助ける)という
お誓いです。そうすると南
無阿弥陀仏を称えつつその
御名を聞いていることは、
称えている一声一声に(称
えるばかりで助ける)を聞
く、すなわち(ソノママナ
リデ助ケル、引キ受ケル、

ソノ外ニ何モイラナイ)を
聞いていることになります」

B 「なるほど念仏を称え聞
くところに、(一声なりとも
称えるばかりで引き受ける)
というアミダ仏の救いを聞
いている。それは(まるま
る弥陀が助ける)という第
十八願のお助けを聞いてい
ることになるのですね」

A 「ええそうなのです。十
八願の(乃至十念 若不生者
不取正覚)の誓いをお念仏
において聞いていることに
なります。ときどき(乃至
十念は報恩の称名だ)とい
われることがあります、
第十八願の(乃至十念)は
無条件の大悲の救いを表現
した、それこそ親鸞聖人が
『一念多念文意』に乃至十
念を註釈された文に、

本願の文に、「乃至十念」
と、ちかいたまえり。すで
に「十念」とちかいたまえ
るにてしるべし、一念にか
ぎらずということ。いわ
んや「乃至」とちかいたま
えり、称名の遍数(へんじゆ)
さだまらずということ。この誓願
は、すなわち易往易行のみ

ちをあらわし、大慈大悲の
きわまりなきことをしめし
たまうなり。

といわれるごとく、(乃至十
念の誓い)は大慈大悲のき
わまりのない大慈悲の表れ
です！」

B 「そうすると(聞其名号)
でその名号を聞くとというの
は、大慈大悲の乃至十念の
念仏の誓いを聞くことなの
ですね」

A 「ええ、お声とまでなつ
てくださっている誓いの名
号を聞くことであり、名号
を聞くと第十八願(乃至
十念 若不生者 不取正覚)
ソノママナリデタスケル)
を聞くことなのです」

B 「お念仏の声を聞くこと
がそのまま大慈大悲のお心
を聞くことなのです。で
は聞くとどうなるのですか」
A 「名号を聞くと南無阿弥
陀仏の(タスケル)(助カラ
ヌ汝ヲタスケル)という大
慈大悲のお心を聞くことに
なり、そのアミダ仏の大慈
大悲のお心は私たちの煩惱
妄念がどれほど多くても、

それに妨げられることなく、煩惱の心を突き抜けて大慈大悲のおところが我身の髓にまで届いてくださるので。これはアミダ仏の無碍のお徳によるのです。そこに大悲が届いて私たちに信心が発起するのです。それが「聞其名号」の次の「信心歡喜」のお示しです」

B 「そうするとアミダ仏の大悲心が届いて信心として私の上を起こって来るのでしたら、信心の本質はアミダ仏の信心大悲なのですね」

A 「ええそうなのです。信心は常にはたらいてましますアミダ仏の大悲心が私の上にはたらいているすがたといつていいですね。常にはたらいているアミダ仏の大悲心と離れて別に衆生の信心があるのではありません。ここは注意すべき点です」

B 「私の上を起こった信心ですが、常にはたらいているアミダ仏の大悲心と離れていないのですね」

A 「ええそうなのです。私の心に離れない信心であるばかりか、アミダ仏に離れ

ない信心です。それはちよーうど、夜に輝く月の光が池の表に届いて月影を池の表に宿す如くです。池の表面に映っている月の姿は天上の月のはたらきと離れない。しかも池の水にも離れない。空のお月さんはアミダ仏であり、池の水は凡夫の心であり、その凡夫の心に月の影を宿すように月光(信心)が信心となつてくださるのです」

B 「そうすると、凡心と信心とが離れず、しかも池の水(凡心)の状態によって月の光が届かないとか消えてしまふとかがないようなものですね」

A 「ええ一度届いた信心はアミダ仏が常なるが如く凡心に常にはたらいてくださる信心です。なくなりません」

B 「聞其名号の次に「信心歡喜」とありますが、歡喜とは」

A 「アミダ仏の大悲心にふれて凡夫に起こった信心は、はじめて大悲の心にふれ、また生きたアミダ仏のいのちにふれて、凡夫の閉塞さ

れた真つ暗な心に光が入つて、中が明るくなるように人生の根本気分が明るくなり、いのちが満たされるのです。それは本当は身も心も躍りたくなるほどの喜びなのだと思ふは仰せられます。我が身に信心が起こつたということは躍り上がったと喜びざるを得ないほどの価値のあることだと積尊は仰せられるのです。それは量りないのちと離れない我が身を知ることにもなります」 (了)

【住職雑感】

*七月十三日、近くのプロテスタント教会のI牧師の縁で、牧師と私たち夫婦が妻の運転で、奈良県天理市の近くのA氏の家で催されたミニコンサートを聴きに行った。A氏が昨年、築二百年以上前に建てられた大きな古民家を購入し、A氏の趣味に合わせてリフォームし、各種イベントが出来る場所として提供しているのである。今回はA氏がバロック音楽が好きなのもあってバロックのミニコンサートが行われた。リュートとバイオリンとチェロの古楽器による三人の若いプロの演奏で、十七世紀末までの曲を数曲演奏された。部屋は和室二間を空けて行われた。中でもバイオリンの演奏するシャコンヌは非常に美しかった。パツハのあのシャコンヌに連なるような音曲であった。聴衆は地元の人たちも来て、三十名ほどであった。

《二〇二三年度東本願寺基金御懇志報告》

- 懇志者名(敬称略) 青木宏克 赤股弘子 秋常芳子 浅野真由美 足立美明 石川紀美子 伊東清文 稲田富恵 井上守 岩谷龍 岩田能一 植田節美 宇田聡 小澤謙 小畑住子 改発正浩 香川郁夫 加藤忠 屋八千子 川端靖雄 喜多真澄 窪ナル子 児玉慶子 佐藤孝幸 下野誠二 島田千づる 白石千鶴子 城越香織 寿賀晴剛 関宥江 高田幸子 高田公子 谷村征世 津田衛一郎 土居令子 長井一江 中川政二 中野夕カ子 中村洋子 中村穂積 中村匡子 中村幹夫 西塚祥子 長谷川満 泰京子 濱秀子 原崎佳水 平田幸子 町百合子 三浦一浩 宮野妙美 宮野道子 室塚良治 森野茂治 山下絹子 山下秋喜 山下東洋栄 山科瞳 吉岡正人 吉田徳子 吉ノ蘭睦枝 中村美登子 宮本万里 中村泰司 合計(総額) 二二〇〇〇〇円

以上の皆様方より御懇志を賜りました。大谷派(東)本願寺の方に納めさせて戴きます。有難うございました。 合掌

《秋季彼岸会》

九月二十二日(日)

午後二時始まり

法話 念佛寺住職

*帰敬式の実施

彼岸会法要の後、午後四時過ぎから帰敬式を行います。ご希望の方はお申し込み下さい。帰敬式とは積尊のお弟子となる儀式で、法名(積〇〇)をいただきます。なお費用は、本山東本願寺への冥加金と別途諸経費込みで一人一五〇〇〇円です。